

主 題：主の教会の誕生

聖書箇所：使徒の働き 2章42-47節、6章3節

主イエスは「わたしの教会を建てます」と弟子たちに約束されました。マタイ16：18「ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」、そして、主が約束された通りに教会が建てられました。どのように建てられたのか、その経緯を話したいと思います。主イエス・キリストは死から復活された後、40日の間、この地上でご自身の肉体をもってよみがえられたことを証明されました。そして、主が天に凱旋なさったときにはすでに120人の主を信じる人々がエルサレムにいたことが聖書に記されています。使徒の働き1章です。14節から見ると、どういう人たちであったのかが書かれています。「14 この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。15 そのころ、百二十名ほどの兄弟たちが集まっていたが、ペテロはその中に立ってこう言った。」、注意していただきたいのは、15節に「兄弟たち」とクリスチャンたちのことがこのように記されていることです。このように呼んだのはここが初めてです。

今話したように、イエスの天への凱旋から10日後、2：1を見ると「五旬節」と書かれています。「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。」と。ペンテコステとも呼ばれますがこれは「50日目」ということです。「五旬節」とは50日目であり、ギリシャ語の「ペンテコステ」というのも「50日目」という意味です。それは過越の祭りから50日目に祝うユダヤ人の収穫のお祭りのことです。この日にあることが起こったのです。それは、イエスが約束されていたように、聖霊がイエスを信じるひとり一人の上に下るという出来事です。ですから、教会はそのことを記念して、今も聖霊が降臨した日ということで祝い続けています。実は、その日が先週の日曜日でした。敢えて、私が今この箇所を選んでメッセージをしているのは、先週はこの場所には皆さんがおられなかったのも、もちろん、いろんな形で礼拝に参加してくださったのですが、皆さんがともに集まったときに、この主が与えるみことばをいっしょに見たいと思っていましたからです。今日がその日です。

この五旬節の日、過越の祭りから50日が経ったユダヤ人の収穫の祭りのときに、イエスを信じる者たちのうちに聖霊が下り宿られたということです。これが教会の始まりだということです。この出来事を通して教会が始まったのです。2章を見ると、聖霊が下った後、ペテロはメッセージをします。というのは、人々はいったい何が起こったのか当惑していたからです。そこで、ペテロはこれはすべて主のみわざだということをお話すのです。そして、2：38、40「38 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けましょう。…40 ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、「この曲がった時代から救われなさい」と言って彼らに勧めた。」と。そして、何が起こったのか？41節に「そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。」とこうということが五旬節の日に起こったのです。

ですから、120人ほどの人たちが集まっていたその集まりが、この日に三千人が加えられたのです。これが初代教会、初めて誕生した教会だったのです。この教会を神は大いに喜んでおられたこと、そのことはみことばが私たちに明らかに示しています。神の栄光が現わされる教会でした。最初に話したように、だから、私たちはこの教会を見たいのです。どんな教会だったのか、彼らはどんなことをしていたのか、どうして神はこの教会を喜び祝されたのか…、なぜなら、それは私たちにとって大きな模範だからです。ですから、この初代教会から今の私たちが模範とするべき教会の姿をいっしょに学んでいきたいと思ひます。

まず、2：42「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」を見ましょう。この「堅く守り」ということばはこのような意味があります。「揺るがないで忍耐強く続ける、専念する、(あること)から離れない、屈せずにやり通す」と。このことを聞くとどういう意味なのかが分かります。しかも、このことばは新約聖書に10回出て来ますが、使徒6：4には「そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」「励む」と訳されています。ローマ12：12には「望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。」、ローマ13：6「…彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです。」、コロサイ4：2「目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。」とここでは「たゆみなく」と訳されています。使徒1：14では「…みな心を合わせ、祈りに専念していた。」です。

まとめるとこういうことです。この2：42で「堅く守り」と訳されているのは、当時のこの初代教会

の人たちがあることを継続して行い続けていたということです。辞書には「一生懸命にあることを継続して行く、困難に関わらずが含まれている可能性がある。」とあります。ですから、どんなに辛くてもどんな困難があってもこの人たちはあることを一生懸命行い続けていたということです。ルカは（ルカがこの「使徒の働き」の著者）そのことを記した上で、では、彼らは実際にどんなことをしていたのか？ 先ず、42節には四つのことが記されています。今日、私たちは全部で九つのことを見ていきますが、当時の信仰者たちが「専念し励んでいた」こと、私たちが模範とするべき初代教会の九つの特徴について見ていきましょう。

☆模範とするべき初代教会の特徴

1. みことばを實踐する教会 42節

1) みことばを学ぶ

2) みことばを實踐する

「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、」、使徒たちの教えを守り続けていたと言います。この教会は「みことばを實踐する教会」だったのです。彼らは使徒たちが教える神の真理をしっかりと学んで、それをただ聞くだけでなく実践していたのです。言い方を変えるなら、彼らはイエスに献身的に従う者たちだったのです。私たちも神に献身的でありたい、もっと神に喜んでいただきたいと願います。

どうすればいいのか？神のことばに従うことです。神が言われたことをすることです。それを神が一番お喜びになると言います。詩篇119：1には「幸いなことよ。全き道を行く人々、【主】のみおしえによって歩む人々。」と、神が祝される人、神が大いに喜ばれる人とは「全き道を行く人々」と「【主】のみおしえによって歩む人々。」であると言います。「全き道」とは「神のみことばに従っていく道」です。「【主】のみおしえによって歩む人々。」とは「主の教えに心から誠意をもって服従する人」です。

ですから、繰り返しますが、あなたが神からの祝福をいただきたいと願っているなら、神のみことばに服従することです。憶えていますか？皆さん。イスラエルの初代の王サウルがアマレク人を聖別しなさいという命令を受けたときに、彼は確かに聖別をしますが、家畜を残しました。神の命令は家畜に至るまですべてを聖別しなさいでした。彼はこんな言い訳をしました。「いや、傷のない小羊などは神におさげしようと思いました」と。そのときにサムエルはこのように言っています。「するとサムエルは言った。「主は【主】の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」（I列王記15：22）

言っていることは同じです。神がお喜びになること、神が祝されることは、私たちが神が言われること、神のみことばに服従することです。そして、感謝なことに、あなたはその教えに服従することができるのです。神がその助けを与えてくださるからです。ですから、私たちの心にしっかりと刻まなければならないことは、神のおことばをただ聞くだけでなくそれに従うことによって神は私たちを祝してくださるということです。だから、教会であっても、どのような学びであっても、しっかり心しなければならぬことは、そこでは必ず神の真理が語られるということです。それは語る者の責任です。礼拝だけでなく、教会学校でも聖書研究会でも家庭集会でも、すべて語る者の責任は神の真理を語ることです。

そして、そこに集うあなたの責任は「語られていることが本当に聖書が教えていることかどうかをしっかりと吟味すること」です。なぜなら、聖書を使いながら語り手の語りたいことを語っているケースが多々あるからです。それは間違いです。私たちは神が語りなさいということ語るのです。そして、確かにそれが聖書の教えであるなら、あなたの責任はそれを実践することです。実践することによって、あなたの信仰は確実に成長していきます。こうして私たちは生きるのです。テトス1：9「教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。それは健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを正したりすることができるためです。」。

2. 交わりのある教会 42節

「交わりをし、」とあります。この教会は継続して「交わり」をしていたのです。この「交わり」ということばは「何かを分かち合う、手を取り合って助け合う」という意味があることばです。ですから、兄弟姉妹たちが集まったときに、彼らは互いに助け合っていたのです。どんなことをもって助け合っていたのか？

1) キリストを崇めること : キリストを崇める交わりでした。パウロはローマ15：6で「それは、あなたがたが、心をつにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。」と言っています。神が望んでおられることは、信仰者が集まったときにひとり一人がそこにあって神を誉め称えることです。私たちは神から多くの祝福をいただいています。私たちは神が与えてくださった恵みをみなと分かち合うことによって、いっしょになって神を誉め称えるのです。そういう交わりです。

私たちが一週間に一度集まったときに、私たちがすることは「神はすばらしい！こんな祝福をくださった。」と分かち合います。祈りの課題があってもそこに希望を見出します。どのようにみわざを成し

てくださるのか？どのようにこれを通して栄光を現してくださるのか？と期待できるのです。ハレルヤ！と。

2) 信仰の成長を助け合う : 同時に、彼らは集まったときにそれぞれの信仰の成長を助け合っていました。これも交わりの特徴です。パウロはローマ15:2で「私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」と語っています。Iテサロニケ5:11でも「ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」と言いました。

信仰者が集まったときにそれぞれが考えることは、いっしょになって成長しようと、それを目的として集まっているのです。注意しなければ、それがクリスチャンたちの集まりであってもそれぞれの信仰に役立つことではなく、成長の妨げとなるような集まりになることがあります。その問題の原因は「罪」です。

3) 聖さにおける成長を助け合う : ですから、注意すべきことは、その交わりを通してそれぞれが聖さにおいても成長することです。そのことを願うのです。罪があれば神は喜ばれません。もっと言えば「神の栄光を汚す」のです。ですから、私たち信仰者が集まったときにはその罪を除いていかなければなりません。たとえば、私たちが集まったときにそこでだれかの悪口を言うような集会ならどうしますか？巧みなことばを使って露骨に語られていなくても、そこにある本質はだれかのことが嫌いでその人の悪口を言うのです。それは「罪」です。神の栄光を現しません。信仰者を助けるものでもありません。ですから、交わりが持たれるとき私たちが考えるべきことは、その「交わりの目的は主を崇めるため」です。そこに集う信仰者ひとり一人の信仰が成長するためであり、同時に、聖さにおいても成長する、そういう交わりであること、そういう人に変えられて行くために助け合う交わりでなければなりません。もし、私たちが交わりを持つときに「あの人は嫌いだからあの人には入ってもらいたくない」というような思いをもって参加するなら、神は喜ばれないしその交わりを祝されることもありません。自己満足の集会で終わるでしょう。「楽しかった…」で終わるかもしれません。悲しいことに、神が喜ばれないならその時間は無駄です。

この初代教会で彼らもっていた交わりはそのような偏った人間的な交わりではなかったのです。神が喜ばれる交わりであって、それを通して信仰者の信仰が成長していたのです。

3) 主の十字架を誇りとする教会 4 2 節

「パンを裂き、」とあります。彼らは継続してパンを裂き続けていたのです。これは聖餐式のことです。彼らは聖餐式を行うことに専心し励んで行っていたのです。注意しなければいけないことは、私たちも行う聖餐式をたとえば毎週行っていたら、毎日行っていたならそれが霊的成長を助けてくれるのか？そうではないということです。聖餐式をする目的は二つあります。

1) 主の十字架での尊い犠牲を覚える : 主イエス・キリストがどんな犠牲をもって私のような者を救ってくださったのか、これを覚えて行ないなさいと。私たちは主を覚えて主が成してくださった尊い犠牲のみわざを覚えて聖餐式を行うのです。それを継続して行い続けていた。つまり、彼らはずっとイエスの十字架を覚えていたのです。間違いなく、彼らはイエスの十字架を誇りとしていたのでしょう。こんな犠牲によって私たちは救いに与ったと。そして、私たちにとって日々イエスの十字架を誇りとしながら生きることが主のみこころであると知っています。問題は、そのようにあなたが生きているかどうかです。Iコリント11:24、25「:24 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」:25 夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」。

2) 自らの心を吟味して罪から離れる : Iコリント11:28に「ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。」、そこに参加すれば目的が達成したわけではありません。私たちは日々イエスの十字架を覚えるとともに、私はこの主の前を正しく歩んでいるのかどうか、十字架によって救われた私はそれにふさわしく生きているのかどうかと自分を吟味する機会です。

この教会はイエスの十字架を日々覚えながら、自らを吟味しながら歩み続けていました。

4) 祈る教会 4 2 節

「祈りをしていた。」と、この教会は「祈る教会」だったのです。確かに、みことばは「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。」(ルカ18:1)と教えています。主は私たちに「祈りなさい」と命じられました。全知全能の神と私たちは個人的に交わりを持てるというすばらしい特権に与っています。でも、悲しいことに、信仰生活の中で祈りは優先順位からは後の方になっています。もしそうなら、あなたの信仰生活は神に喜ばれるものに変えられて行くこと期待できますか？あなたの信仰が成長することを願っているなら、あなたは「祈りの人」と変えられて行くことです。祈りに関して成長することです。主のみわざを期待するなら、あなたは常に主の前

に立つことです。それを喜びとすることです。

この祈りということを考えるとき、私たちがささげる祈りは救われる前の祈りとは根本的に違います。救われる前の私たちは自分の願いが叶えられることだけを求めて祈っていました。「これを叶えてください。～をしてください。」と。でも救われた私たちは根本から祈りが変わりました。私たちの願い事を神の前にもっていくことができますが、私たちが願うことは「主よ、どうぞあなたのみこころを成してください。」です。Iヨハネ5：14をご覧ください。ヨハネはとても大切なことを教えています。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。」、恐らく、私たちの多くはこの前半を無視して「神はその願いを聞いてくださる」ということに焦点を当てて、前半に自分の好むことばを付けているかもしれません。たとえば、一生懸命主に仕えるなら「神はその願いを聞いてくださる」と、神が喜ばれる信仰者として熱心であれば「神はその願いを聞いてくださる」と。これは救われる前と全く同じです。神との間に give&take が成立するのです。これだけしましたから神さま私の願っているものをください…と。これは私たち信仰者の祈りではありません。ヨハネは言いました、「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、」と。

つまり、私たち信仰者の確信とは「神のみこころが絶対に成される」です。主の完全なみこころが成されるのです。そうすると、救われる前の私たちは「私の願い」があつて何とかその願いが叶えられるように、神のその腕を曲げてでも、私の願い事に耳を傾けてそれを叶えてくださいと祈りました。ところが、救いに与った私たちは完全な神のみこころに私たちの願いを従わせようとします。だから、神の前に私たちの願い事を持っていったときに言うことは、「でも神さま、どうかあなたのみこころを成してください」です。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださる」、つまり、必ず神はみこころを成されるからです。

だから、私たち信仰者が祈りをするときに覚えることは、自分の弱さ、不完全さをしっかりと覚えることです。なぜなら、私たちは自分の中でこの考えが最善だと思っていませんか？よく考えてこれが最善だと思っているし、いろんな人に聞いてもみなそう言っていると。そうすると私たちはあたかもそれが神のみこころである、最善であるかのように思ってしまう。でも、私たちが気付かなければならないことは、残念ながら、私たちがどんなに考えたとしても、どれだけの人に相談したとしても、私たちは失敗する者だということです。だから、どうするのか？神の前に願い事をもって行って「主よ、どうかあなたのみこころを成してください。私はそれに従いますから。」です。だから、祈るときに必要なことは私たちの思いや考えを当然神の前にもっていくことはいいのですが、それをすべて神の許に置いて「主よ、どうかあなたの願い事が成りますように」と神のみこころを求めるのです。

なぜ、そう祈るのか？主のみこころが最善だからです。主のみこころだけが神の栄光を現すのです。そして、主のみこころがあなたにとっての益なのです。それが神が私たちに教えていることで「そういう神だ」ということです。意地悪をされる神ではありません。出し惜しみをするような神ではありません。あなたを愛してあなたのためにご自分のひとり子を十字架に架けて殺した神は、あなたに最高なものを与えてくださる。それが私たちの神であるから「主よ、どうかあなたのみこころを成してください。私はそのみこころに従いますから私を助け私を導いてください。」と祈ります。

間違いなく、この初代教会の信仰者たちはそのように祈るのです。主のみこころを求め続けます。主のみわざが為されることを祈り続けるのです。そのような信仰者が必要です。主のみこころが必ず成されるという確信をもって祈り続ける信仰者、私たちはいろいろなことを経験しますが、その中にあっても必ず主のみこころが成されると、主に希望を置いて生きる信仰者、そういう信仰者が私たちの教会に必要です。

この初代教会を見たときに、まさに、そういう人たちがこの教会を形成しているのです。この後見ていきますが、道理で神はこの教会をお喜びになり、道理で神はこの教会を祝された。そういう祈りの人々がこの教会を構成していたのです。そんな祈りの人にあなたはなりたいと思いませんか？そんな人が必要なのです。

5. 主を恐れる教会 43節

43節「そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議なわざとあかしの奇蹟が行われた。」、この教会は「主を恐れる教会」だったということです。「一同の心に恐れが生じ、」と書かれています。直訳すると「恐れがすべての人に生じた」です。例外なく、すべての人が恐れをもったということです。ギリシャ語の辞典では「恐れがあらゆるたましいに臨んだ。恐れに襲われない人はひとりもいなかった。」となっています。

・恐れ： 何回か見たように、「恐れ」というと私たちは「怖い」という感情を思います。そして、そのことが43節に書かれています。確かにそうだったのでしょう。なぜなら、「使徒たちによって多くの不思議なわざとあかしの奇蹟が行われた。」とあり、その奇蹟を見たときにみなは恐れたのです。神が彼

らを通してみわざを為しておられるとき彼らは恐れたのです。

・**恐れ** : 同時に、畏敬の念、神を敬う気持ち、つまり「畏怖」の気持ちも「恐れ」です。心からの神に対する尊敬です。どちらも私たちには必要です。人間の問題の核心部分は「神を恐れなくなった」ことです。神に対する「恐れ」がないのです。アメリカで流れている最近のニュースを見ると、ある人たちが、保守的な人たちですが、今の大変な現状を見て「何が起こったのか？それは神に対する恐れを失ってしまっている。」と言います。悲しいことに、私たちの国はそれを遥か昔に失ってしまっています。みことばはこう言います。詩篇36:1「罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない。」、パウロはローマ3:18で「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」と旧約聖書から引用してこう記しています。だから、私たち人間の一番の問題は「恐れるべき神を恐れていないこと」です。

そして、恐れるものがなければ人間は自分の欲を満たすことしかしません。自分のやりたいことだけをするのです。どんなふうにも生きても構わないじゃないか、自分の人生なのだから…と。神に対する恐れがないからです。私たちが覚えるべきことは、すべての人はみな例外なく神の前に立って神のさばきを受けるときが来るということです。

そして、もし、私たちが全知の神＝すべてのことをご存じの方、遍在の神＝どこにでも私とともにいてくださる方、どこに行ってもともにいてくださる、この神が私たちの心を見ておられる、私のすべてを見ておられる、私の考えることすべてをご存じだ、私のうちに湧いて来る思いや考えのすべてをご存じだと、そのことを思うなら私たちの心は怖くて震えませんか？私たちひとり一人は神の前に不完全で罪に汚れた者だからです。私たちが神に対する恐れを抱いているなら私たちは罪から離れようとしています。

モーセがイスラエルの民に神からいただいた十戒を語ったときに、神は語られる十戒とともに大変なみわざを為さるのです。出エジプト記20:18-20「:18 民はみな、雷と、いなずま、角笛の音と、煙る山を目撃した。民は見て、たじろぎ、遠く離れて立った。」と民はこれらを目撃します。そうすると民は神に対して大変な恐れを持ちます。そこに神がおられることを民は悟るからです。「:19 彼らはモーセに言った。「どうか、私たちに話してください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちにお話しにならないように。私たちが死ぬといけませんから。」:20 それでモーセは民に言った。「恐れてはいけません。神が来られたのはあなたがたを試みるためなのです。また、あなたがたに神への恐れが生じて、あなたがたが罪を犯さないためです。」

このレッスンは救いを拒んでいる者たちだけに必要なのではなく、私たちクリスチャンにも必要です。私たちが「神を恐れる」ということを学ばなくてはいけないのです。本当に恐れているなら、私たちが神を悲しませ神の栄光を汚す罪から離れようとするからです。

そして、もう一つ付け加えるとすると、主を恐れて生きることが私たちが神から祝福をいただく術なのです。イスラエルの民がエジプトを出て来ました。彼らは罪ゆえに40年間荒野を歩き回るのでした。出て来たその初代の者たちはヨシュアとカレブの二人を除いてみな死に絶えてしまいます。次の世代が起こって彼らのその世代がヨシュアとともに約束の地に入って行こうとします。そのときモーセは彼らに警告を与えるのです。申命記6:24「それで、【主】は、私たちがこのすべてのおきてを行い、私たちの神、【主】を恐れるように命じられた。それは、今日のように、いつまでも私たちがしがわ寄せであり、生き残るためである。」、31:13にも「これを知らない彼らの子どもたちもこれを聞き、あなたがたが、ヨルダンを渡って、所有しようとしている地で、彼らが生きるかぎり、あなたがたの神、【主】を恐れることを学ばなければならない。」とあります。私たちが同じように主を恐れることを学ぶことが必要です。主を恐れるなら、間違いなく、私たちの生き方にすばらしい影響を及ぼすからです。

ですから、主を恐れている人は主に喜ばれることを行いたいといつも心がけている人です。この教会は主を恐れる教会であったのです。

6. 分かち合う教会 = 兄弟を愛する教会 44-45節

44-45節「:44 信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。:45 そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。」、同じようなことが、使徒4:32、34、35にも記されています。「:32 信じた者の群れは、心と思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。」「:34 彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、:35 使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておのおのに分け与えられたからである。」と、兄弟姉妹が愛し合うゆえにそれぞれの必要を補っていたということです。「これは自分のものだから私…」ではなく、必要のある人にそれを分配していたと言います。彼らはこの地上のことだけでなく永遠を考えたのです。この地上にどれ程宝を積んでもそれを持っていくことはできません。全部置いていかなければいけない。彼らが考えたことは、地上ではなく「天に宝を積みましょう」でした。

ですから、主が言われたことを実践するために、彼らはこうして自分たちの持っている物を分かち合いながら人々を助けたのです。それを行っていなかった教会が今私たちが学んでいるコリント教会です。

この初代教会は兄弟姉妹を愛するゆえに、持っている物を分かち合いながら助け合っていた教会だったのです。

7. 礼拝する教会 = 神を愛する教会 46節

「そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし」と、この46節にも、42節で私たちが見たように、兄弟たちが一生懸命に継続して励んでいた専念していたことを教えています。そういう動詞が使われていることを見ました。憶えていますか？彼らが励んでいた四つのことを見ました（教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた）。この46節にも同じことばが使われています。ということは、この教会はこういうことを熱心に行い続けていたということです。彼らは「毎日、心を一つにして宮に集ま」っていたと言います。

・心を一つにして：彼らは霊的一致をもって毎日宮に集まっていたのです。

1) 宮に集まり = 当時、残っていたエルサレムの神殿に彼らは集まっていたのです。紀元70年にそれが滅びるまで、彼らはそこに集まっていたのです。つまり、この教会は主を礼拝することを喜びとしていたのです。個人としてもそうだけれど群れとしてもいつも神を誉め称えたい、いっしょになって神を崇めたいと。彼らは義務感で教会に来ていたのではないのです。彼らは主を愛するゆえに喜んで来ていたのです。すでに見たように、彼らは兄弟姉妹を心から愛していました。そして同時に、彼らは神を愛するゆえに神を崇めたいとともに宮に集まったのです。

2) 家でパンを裂き = そして、その礼拝の後彼らは愛餐をするのです。食事もしました。この箇所では「家でパンを裂き、」そして、「喜びと真心をもって食事をともにし」と書かれています。恐らく、彼らには三千数百人の人たちがいるわけです。一堂に集まる場所は存在しません。だから、彼らはそれぞれの家に分かれたのです。まさに家の教会のようです。そうしてそれぞれの所で食事もし、ともに聖餐式を行っているのです。そこでともに主の十字架を覚えるのです。自らの心を吟味するのです。このようにして彼らは主を礼拝することを喜びとしていたのです。

考えさせられませんか、皆さん。私たちがどのようにこの礼拝を考えているのか？彼らは毎日集まっていた。強制されてではない。彼らはやりたかったのです。万難を排して神を礼拝したかったのです。私たちは礼拝をする者として生まれ変わりました。私たちの生活の中で礼拝はどの順位なのでしょう？どの位置を占めているのか？神を礼拝することができる、これは私たちにとって最も幸せなことではありませんか？だから、多くの皆さんは普段できていたともに集まって礼拝するというこの共同の礼拝ができなくなったとき、この機会を心から求めたはずです。

今までは毎週集まって来ていたのにそれができなくなった。ある面で今日は特別な日です。こうして顔を合わせていっしょに神を崇めることができる。この人たちはそれを毎日やっていたのです。何回やったからいいのではありません。問題は、本当に神を愛して神を崇めることを何ものよりも喜びとしていたかどうかです。そういう教会だったということです。

8. 喜びにあふれた教会 46c-47節

46c節「…喜びと真心をもって食事をともにし」

1) 喜び：これは何となく嬉しかったのではなく「大喜びしている」様子です。ときにこのことばはことばや態度で表します。「飛び跳ねる、踊っていく」という意味が含まれています。ですから、大変な喜びです。「あなた本当に喜んでいての…？」と聞かれて「喜んでますよ」とどちらかよく分からないような表情で答えるような人たちではなかったのです。だれが見ても分かったのです。この人たちのうちには喜びが溢れていたのです。

しかも「真心」と続きます。このことばは「謙虚、謙遜、純真」という意味のあることばです。想像してみてください。この人たちがそれぞれの家に集まった時に、もちろん宮に集まったときもそうでしょう、喜びに溢れていたのです。神への感謝で溢れているのです。そして同時に、みんな謙虚だったのです。この中でだれが一番だとか、だれが霊的だとか、そんなくだらない話はしていません。みんな仕え合う者たちだったのです。ちょうどパウロが言っている通りです。ピリピ2：3「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」と、これが霊的な人の姿なのです。霊的でなければ自分を誇りたいのです。自分を自慢したいのです。自分を人々の前で見せびらかしたいのです。でも、主によって自分の本当の姿が悟らされている人間というのは、自分を誇るようなことはとうの昔に止めています。私たちの誇りはイエスだと言います。そして、彼らはみんなが謙虚になって、みんなが仕え合う者として集まっていたのです。

2) 神を賛美：こう続きます。47節「神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」と。これは神の偉大さ、すばらしさ、卓越さを彼らは口にしていたということです。皆さん、描けますか？喜びに溢れた人々が集まっていて、みんな人に仕える者たちであり、そして、彼らが口にすることは神のすばらしさであったと言うのです。

彼らが考えていたのは自分のことではありません。彼らがフォーカスを当てていたのは自分たちではなく神に向けていたのです。だから集まったときに神のすばらしさを語り合うのです。なぜ、こんなことがこの群れの中に為されていたのでしょうか？その核心は彼らが聖霊に満たされていたからです。聖霊なる神が喜びの源であり、その方によって彼らは満たされていたのです。人間的な努力によってこんなことを私たちが再現しようとしても無理です。これは神のみわざなのです。神が彼らに喜びをくださっていたからです。ということは、あなたや私も同じように歩むことができるということです。なぜなら、私たちも聖霊をいただいているからです。

9. 霊的な教会 6 : 3

6章には2-3節「:2 そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。:3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。」と書かれています。この7人が執事だとは書いてありません。少なくとも、エルサレム教会においてこのような働き人が必要だ、そして、人数的にも7人がいだろうということで彼らはそれを選んだのです。でも、この選びにおいてどんな条件があったか？ここに書かれています。「御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち」と。

つまり、聖霊に満たされている人たち、神の知恵に溢れている人たち、そして、周りの人たちから、外部の人たちからも評判の良い人たちを選びなさいということです。教会内だけでなく教会外でも言います。こういう人を選びなさいと言ったのは、こういう人がこの群れには必要だからです。こういう人たちが十二使徒たちができない働きを補っていくのです。まさに、霊的な人たちがリードする教会だったのです。彼らはこの社会において成功した人、学歴の高い人を選びなさいなどとは言っていません。神の前に喜ばれる人、霊的な人を選びなさいと言いました。

この初代教会の姿を今見て来ました。みことばを実践する教会だったし、神が喜ばれる交わりを行っている教会であり、常に主の十字架を誇りとする教会であり、みこころを求めて祈り合う教会であり、そして、主を恐れる教会であり、分かち合う教会、兄弟を愛する教会であり、礼拝する教会、神を心から愛する教会であり、喜びに溢れた教会、そして霊的な教会だったと。

先程も話したように、教会が誕生しました。そして、このペンテコステまで120人は救われていました。恐らく、Iコリント15章にあるように、イエスは500人以上の人たちに現われました。エルサレムに120人位いた、恐らく、ガリラヤの近辺に500人位いたのでしょう。詳しいことは記されていません。でも、少なくとも聖霊が下る前に、ペンテコステの前にイエスを信じる者たちはいたのです。でも、その人々の上に聖霊を下らせることによって新しい働きが始まったのです。教会が誕生し、そして、神はこの教会を通してみわざを成すと、その働きを始められたのです。

今、私たちが見て来たこの9つの教会の特徴、このような教会として彼らが建て上げられ、教会として用いられたのは間違いなく聖霊なる神の助けによってです。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。」(使徒1:8)「力を受ける」と。その神の力によって彼らはこのような歩みを、働きをしたのです。47節を見てください。「すべての民に好意を持たれた。」とあります。人々はこのクリスチャンたちの変えられた生き方を見たのです。彼らが救いに与り罪赦されて生まれ変わった様子を人々は見たのです。だから「すべての民に好意を持たれた」と、すばらしい証が彼らを通して為されていたのです。それは彼らが語るメッセージをただ聞いただけではないのです。人々が彼らを見たからです。彼らのうちに働いている、人を生まれ変わらせる力のある神を、そして、その神が実存されていることを実際に彼らが見たからです。ヨハネ13:35にはこのように記されています。「もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と。

しかも、彼らが見たのはひとりではなくてこの群れ全体の中です。どうりで、神はこの教会をお喜びになった。その証拠に「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」と、この教会を喜んでおられたのです。神はこの教会を大いに祝されたのです。これがこの初代教会です。これが私たちが模範とすべき教会です。

最後に、皆さんにチャレンジしたいこと、それは「あなた自身が日々聖霊に満たされて歩むこと」です。あなたが聖霊に満たされて歩むなら、間違いなく、主が喜んでくださる人へと変えられていきます。皆さんが「神さま、どうか私を変えてください。どうかあなたに用いられたいから私を変えていってください。そのためにどうか私のすべてを満たしてください。聖霊によってすべてを満たし、私の考えも私のことばも行ないも、すべてあなたが喜ばれる、あなたのすばらしさを現わすものとなるように。」と願うことです。

二つ目に「教会へのあなたの責任を覚えて生きること」です。教会へのあなたの責任です。なぜなら、あなた個人の歩みが教会の祝福には大切だからです。あなたの歩みが教会全体に祝福をもたらすからで

す。「いや、私なんか…」と言われるかもしれませんが、この教会を見た時にみんながそのように生きていました。「私のような存在はどうでもいい…」ではなくて、あなたの歩みが非常に大切だということです。だから、私たちひとり一人がそのことを決心しなければいけません。「神さま、このように生きて信仰の先輩たちのように私もそのように生きていきたい。この教会に祝福をもたらす者でありたい。この教会から祝福を奪う者であってはなりません。」と。

そして、彼らの行ないを私たちがしっかり覚えて、どうか、あなたがまずみことばを实践する人に変えられてください。そのような者として成長してください。そのときに神はあなたを祝してくださり、そして、神はあなたを大いにお用いになります。この群れの祝福となるように。そして、何よりも神の栄光を現す器としてあなた自身が用いられますように。そのことを心から願います。